【銀河鉄道の夜（仮）】

1．現実

電車の走行音

電車の止まる音

ジョバンニ　どうして僕はこんなにかなしいのだろう。僕はもっとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。空のずうっと向うに小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。

ジョバンニの頭上に星が灯る

電車の走行音

ザネリ、カムパネルラ登場。ザネリ、ジョバンニを冷やかす

ザネリ　ジョバンニ、父さんは帰ってきたかい。らっこの上着は来たかい。

ジョバンニ　ザネリ、烏瓜ながしに行くの。綺麗な星だもんね。お祭りに行くの。

ザネリ　お前の父さんもう帰ってこないかもな。らっこの上着が来たら教えてくれよ。帰ってこられたらな。

ジョバンニ　何だい。ザネリ。

ザネリ　　らっこの上着。らっこの上着が来るよ。ははははは。

ザネリ、カムパネルラ退場。

ジョバンニ涙を拭いて、空を見上げる。

ジョバンニ　　お母さん（おっかさん）、今帰ったよ。具合はどう？

母　　ああ、ジョバンニ、今日は具合がよかったよ。仕事はどうだったかい。ああ、今日は涼しいね。

ジョバンニ、母の近くの窓を開ける。

母　　そうだ、今晩はケンタウル祭だねえ。

ジョバンニ　　お母さん、角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげる。姉さんは帰ったの。ああ、この辺が綺麗になってるねえ。このトマトは姉さんが持ってきたのかな。おいしそうだねえ。お母さん、牛乳は……

母、星明かりで新聞を読み始める

ジョバンニ　　お母さん、牛乳は来てないかい

母　　来てなかったろうかねぇ

ジョバンニ　　じゃあ取ってくるよ。

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ジョバンニ　ぼく、お父さんはきっと間もなく帰ってくると思うよ

母　お父さんはこの次はお前にらっこの上着を持ってくると言ったね。言って、まだ

ジョバンニ　今朝の新聞に、今年は漁が大へんよかったって書いてあったよ。だからきっと間もなく帰ってくるよ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ジョバンニ　もう、窓を閉めておこうか。お母さん。お父さんはきっと、きっと漁に出ているよ。お父さんが監獄に入るようなそんな悪いことをしたはずがないんだから。

「らっこの上着」とザネリの声だけが響く

ジョバンニ　この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した大きな蟹の甲らだのトナカイの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持って行くよ。一昨年修学旅行で

母　お父さんはこの次はお前にらっこの上着を持ってくると言った

ジョバンニ　みんな、僕に会うとそれを言うよ。冷やかすように言うんだ。

母　　おまえに悪口を言うの

ジョバンニ　うん。

母　　そう。

ジョバンニ　お母さん、ぼく、牛乳を取ってくるよ。

母　　そう。なら、お祭りも見ておいで。川には入らないでね。

ジョバンニ　うん。一時間半で帰ってくるよ。

電車の走行音

2. 銀河鉄道（白鳥の停車場）

ナレーション　銀河ステーション、銀河ステーション

ジョバンニの頭上の星が明るくなる

ジョバンニ、列車の席に座っている。外は星空。見慣れない光景。

ジョバンニ、前の席のカムパネルラに気が付く。声をかけようとして

カムパネルラ　みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、

ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。

カムパネルラ、ジョバンニの隣に座る

ジョバンニ　何処かで皆を待っていたほうがいいだろうか

カムパネルラ　ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎えに来たんだ。

ジョバンニ　お父さん。

カムパネルラ　ああ！　しまったな。ぼく、水筒を忘れてきちゃった。スケッチブックも置いてきちゃったな。

ジョバンニ　あはは。なんだか僕も、何か忘れてきた気がするよ。

カムパネルラ　ほんとう？　でも構わないよ。もうじき白鳥の停車場なんだ。ぼく、白鳥を見るのが好き。天の川の向こうに飛んでいたって、きっと見えるよ。

カムパネルラ、黒曜石の地図（星座早見表）を開く

ジョバンニ　この地図、どこで買ったの？　黒曜石で出来てるねぇ

カムパネルラ　銀河ステーションで貰ったんだよ。もらわなかったの。

ジョバンニ　（地図を見ながら）銀河ステーションはどこだろう。今僕たちはどこにいるんだろう。

星明かりが強くなる

ジョバンニ　ぼくらもう天の原に来たね。あの河原は月夜かなぁ

カムパネルラ　月夜じゃないよ。銀河だから光るんだよ。

ジョバンニ　この汽車、石炭を焚いてないね。

カムパネルラ　アルコールか電気だろう。

ジョバンニ　りんどうの花が咲いているよ。すっかり秋だね。さっと飛び降りて一輪取ってこようか。

カムパネルラ　ダメだよ。ほら、もうあんなに遠くに行っちゃったよ。

電車の走行音

ナレーション　まもなく白鳥の停車場、白鳥の停車場

ジョバンニ　白鳥、楽しみだねぇ

カムパネルラ　十一時きっかりには着くんだよ

ジョバンニ　ぼくらも降りてみようか

カムパネルラ　そうだね。降りてみよう。

電車の停車音

ジョバンニ、カムパネルラ、席から立ち上がり電車を降りる。

カムパネルラ　この砂、みんな水晶だ、中で小さな火が燃えているよ

ジョバンニ　そうだね。あっちへ行ってみようよ。

カムパネルラ　ああ、変なものがあるよ

ジョバンニ　くるみの実だよ。沢山ある。流れてきたんじゃない。岩の中に入ってるんだ。

カムパネルラ　大きいね。このくるみ、倍はあるね。少しも傷んでない。

大学士、登場する。ジョバンニとカムパネルラの様子をうかがう

大学士　君たちは参観かね

ジョバンニ　何か掘ってるんですか

大学士　くるみが沢山あったろう。ざっと百二十万年前くらいのくるみだよ。おや、そこの突起を壊さないでくれよ。スコープを使いたまえ。おっと、もう少し遠くから掘って、乱暴はしないでくれよ

カムパネルラ　標本にするんですか

大学士　いや、証明するのに要るのさ。ここは百二十万年前、第三世紀の後のころは海岸だった。この下からは貝殻も出る。いま川の流れているところに塩水が寄せたり引いたりしていたんだ。ぼくたちから見るとここは厚い立派な地層で百二十万年前にできたという証拠もあるんだけ

れど、僕たちとは違ったやつから見ても立派な地層に見えるかどうか、証明するのに要るんだ。

カムパネルラ、ジョバンニ、くるみを拾う

大学士　おいおい、優しくやってくれよ。そのすぐ下には肋骨が埋もれてるはずなんだ。

列車の汽笛音

カムパネルラ　もう時間だ。

大学士　そうか。

ジョバンニ　私どもは失礼いたします。

大学士　そうか、そうか、君たちは。いや。さよなら。

カムパネルラ、ジョバンニ、列車の席に座る

大学士、明かりが消えるまでくるみを取り続けている。

電車の走行音

3．記憶の中（活版所）

カムパネルラ、退場

ジョバンニの頭上の星明かりが暗くなる。

ザネリ　らっこの上着がくるぞ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ザネリ　らっこの上着、上着がくるぞ、はっははは

母　お父さんは帰ってこないかもしれない

電車の走行音が大きくなる。汽笛の音。犬の鳴き声。工場の騒音。

音が止む。ジョバンニ、虫めがねを使いながら文選工の仕事をしている。

文選工　よう、虫めがね君。おはよう（からかい気味に）

文選工たちの笑い声が響く

文選工　たいへんだねえ、がくせいさんは。俺達なんざより利口で良いようだあね。がんばりたまえよお。

ジョバンニ、涙をぬぐいながら文字を拾う

文選工　ところで父ちゃんは帰ってきたのかい。らっこの上着は、来たのかい。なぁ、虫めがね君。

文選工たちは笑う。時計の鐘が鳴る。

ジョバンニは椅子から立ち上がり仕事を終える。

銀貨を貰い、ジョバンニ退場する。パンと角砂糖を買って出てくる。

文選工がジョバンニとぶつかる。ジョバンニ、パンを落とす。

文選工　おっと悪いね

文選工、退場する。

ジョバンニ、空を見上げる。パンの砂を払う。退場する。

ザネリ　らっこの上着がくるぞ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ザネリ　らっこの上着、上着がくるぞ、はっははは

母　お父さんは帰ってこないかもしれない

電車の走行音が大きくなる。汽笛の音。犬の鳴き声。工場の騒音。

列車の汽笛が鳴る。

4．銀河鉄道（鳥を捕る人）

カムパネルラ、戻ってくる。

赤ひげ、登場。

赤ひげ　ここへかけてもようございますか。

ジョバンニ　ええ、どうぞ。

赤ひげ、荷物を網棚にのせ、ジョバンニとカムパネルラに向かい合って座る

赤ひげ　あなた方はどちらへいらっしゃるんですか

ジョバンニ　どこまでもいくんです。

赤ひげ　そいつはいい。この汽車はじっさい、どこまででも行きますぜ

カムパネルラ　あなたはどこへ行くんです

赤ひげ　わしはすぐそこで降ります。鳥を捕まえに行くんです。

カムパネルラ　何鳥ですか

赤ひげ　ツルやガン、サギや白鳥です

ジョバンニ　ツルは沢山いますか

赤ひげ　いますとも、いますとも。さっきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。今でも聞こえるじゃありませんか。そら、耳を澄まして聞いてごらんなさい。

水の音が流れる

ジョバンニ　どうして鳥を捕るんですか。標本ですか。

赤ひげ　標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。

カムパネルラ　おかしいねえ。ツルやサギをですか。どうやって。

赤ひげ　そいつはな、雑作ない。サギというものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおっとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるとこを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたっと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切ってまさあ。押し葉にするだけです。おかしいも不審もありませんや。そら。さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです（赤ひげ網棚から荷物を取り、鳥を見せる）

カムパネルラ　目を瞑ってるね

ジョバンニ　美味しいんですか

赤ひげ　毎日注文があります。こっちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。

ジョバンニ、カムパネルラ、鳥を食べる。チョコレートっぽい。

赤ひげ　今年の渡り鳥は景気がいい。素敵なもんだ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、あっちからもこっちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こっちがやるんじゃなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまって、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしぁ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのとこへ持って来たって仕方がねえや、大将へやれって、こう云ってやりましたがね、はっは。

カムパネルラ　こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう

赤ひげ　はっはっは。（鳥をしまい始める）どうもからだにちょうど合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんなあ。ところで、あなたがたはどちらからおいでなんですか

ジョバンニ、カムパネルラ、黙る

赤ひげ　ああ、遠くからですね（大きくうなずく）

列車の汽笛が鳴る

赤ひげ　もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。あれは、水の速さをはかる器械です。水も

車掌　切符を拝見いたします

カムパネルラと赤ひげ、切符を出す。

車掌、切符に切り込みを入れる。

車掌　　あなたのは？

ジョバンニ、服のポケットを探る。上着に緑色のハガキが入っている。

やっちまえと思いながら差し出す。車掌は驚いた顔をする。

車掌　　これは三次空間の方からお持ちになったのですか

ジョバンニ　　何だかわかりません

車掌　　よろしゅうございます。サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時ころになります。

車掌が切符を返却する。赤ひげとカムパネルラは覗き込む

赤ひげ　　おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれぁ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた大したもんですね

ジョバンニとカムパネルラ、赤ひげを無視して窓の外を見る

赤ひげ、退場

カムパネルラ　もうじきワシの停車場だね（地図を見ながら）

ジョバンニ、赤ひげを探し出す

カムパネルラ　あの人、何処へ行ったんだろう

ジョバンニ　ほんとう。どこへ行ったろう。一体、どこかでまた会うのかな。僕、あの人に物を言わなかった。

カムパネルラ　なんだか悪いことをしたかな

ジョバンニ　ぼく、あの人が邪魔なような気がしたんだ。悪いことをしたろうか。なんだか心地が悪いや。

カムパネルラ、床に一枚の銀貨を見つける。ジョバンニに手渡す。

カムパネルラ　ねぇ、何か落ちているよ。きみの物じゃないかい。

ジョバンニ　ああ、銀貨だ。けれど僕の物かわからないよ。

カムパネルラ　あの人の物かな、僕には必要のないだから。また今度車掌さんが来たときに預けようか。

ジョバンニ　そうだ、それがいい（ポケットの中に仕舞う）

星明かりが暗くなる

5. 記憶の中（学校）

カムパネルラ、前の先に座る

先生　ではみなさんは、そういうふうに川だと云いわれたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか

カムパネルラ、手を上げる。ジョバンニ、手を挙げるが、すぐに下ろす

先生　ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょう

ジョバンニ、勢いよく立ち上がる

先生　大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でしょう

ジョバンニ、答えない（もじもじしている）

先生　はあ。しようがないですね。ではカムパネルラさん

カムパネルラ、立ち上がるが、答えない。

先生　……このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。

ジョバンニ、頷く。頷いたまま下を見る。

先生　ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこの砂や砂利じゃりの粒つぶにもあたるわけです。またこれを大きな乳の流れと考えるならもっと天の川とよく似ています。星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮うかんでいるのです。私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えて白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあって地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒、星しか見えないのでしょう。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見え

その遠いのはぼうっと白く見えるというこれが今日の銀河の説なのです。

ジョバンニ、カムパネルラ、着席する

先生　このレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですから次の理科の時間にお話します。今日は銀河のお祭、ケンタウル祭ですね。みなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。

6．銀河鉄道（ほんとうのさいわい）

ジョバンニ　なんだかリンゴの匂いがする。僕がいまリンゴのことを考えたためだろうか。

カムパネルラ　ほんとうにリンゴの匂いだよ。野ばらの匂いもするね。

女の子　あら、ここはどこでしょう。まあきれいだわ！

青年　ここはランカシャイヤだ。いやコンネクテカット州だ。僕たちは空へ来たんだ。私達は天へ行くのですよ。御覧なさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。

男の子、女の子が青年をジョバンニとカムパネルラの前の席に座らせる。

男の子　ぼくおねえさんのとこへ行くんだ。

女の子　お父さんやねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしゃいます。それよりも、おっかさんはどんなに永く待っていらっしゃったでしょう。きっと今頃Ora Orade Shitori egumoなんて歌ってね。雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるニワトコの藪を回って遊んでいるだろうかと考えたり心配してらっしゃることよ。早く行っておっかさんにお目にかかりましょうね。

男の子　うん、だけど僕、船に乗らなけらぁよかったなあ

女の子　ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スター　をうたってやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。

青年　わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないいとこを旅して、じき神さまのとこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そして

わたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きっとみんな助けられて、心配して待っているお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元気を出しておもしろくうたって行きましょう。

カムパネルラ　あなた方はどちらからいらっしゃったのですか。どうなすったのですか

青年　いえ、氷山にぶっつかって船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったのであとから発ったのです。私は大学へはいっていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど十二日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶっつかって一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈ってくれました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しのける勇気がなか

ったのです。わたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたから前にいる子供らを押しのけようとしました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりで背負ってぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじっとこらえてまっすぐに立っているなどとてももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまって船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたけれども滑ってずうっと向うへ行ってしまいました。私は一生けん命で甲板の格子になったとこをはなして、三人それにしっかりとりつきました。どこからともなく声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄に大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入ったと思いながらしっかりこの人たちをだいてそれからぼうっとしたと思ったらもうここへ来ていたのです。この

方たちのお母さんは一昨年没なくなられました。ええボートはきっと助かったにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれていましたから

男の子はすっかり寝てしまう

ジョバンニ　ああ、その船は……（ジョバンニ口をつぐんで落ち込む）

女の子　お母さま（窓の外を眺めている）

青年　なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれが正しいみちを進む中でのできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです

カムパネルラ　いかがですか。先ほど燈台看守に頂いたんです。こういうリンゴは初めてでしょう。

青年　ええ、立派ですね。ここではこんなリンゴができるんですか。

青年、一口食べる。その後に男の子を起こす。二人にリンゴをあげる。

男の子、リンゴを食べる。

男の子　ああぼくいまお母さんの夢をみていたよ。お母さんがね立派な戸棚と

本のあるとこに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこわらったよ。ぼくおっかさん。りんごをひろってきてあげましょうか云ったら眼がさめちゃった。ああここさっきの汽車のなかだねえ

女の子　まあ、あれはカラス？

カムパネルラ　カラスでない。みんなカササギだ。

青年　カササギですね。頭の後ろに毛がぴんと伸びています。

ジョバンニ、少し気まずそうにしている。カムパネルラに話しかけようとする

カムパネルラ　クジャクがいるよ

女の子　沢山いるわ

ジョバンニ　鳥が飛んでいくな。

女の子　まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。あら、あの人は鳥へ何を教えているんでしょう（カムパネルラに向けて言う）

カムパネルラ　わたり鳥へ信号してるんです。きっとどこからかのろしがあがるためでしょう。

讃美歌が流れ始める。青年は青い顔をしている。

カムパネルラ　あれはとうもろこしだねえ（ジョバンニへ向けて言う）

ジョバンニ　そうだろうね（不愛想に返す）

青年、一度立ち上がる。退散しようとして、何かを悩んだ末戻ってくる。

女の子は祈っている。

新世界交響楽が流れ出す。

女の子　ああ、新世界交響楽だわ。あら、インディアン。インディアンです。

御覧なさい。

ジョバンニとカムパネルラが立ち上がる。

女の子　走ってるわ。追いかけているのかしら。

青年　いいえ、いいえ、汽車を追ってるんじゃないですよ。猟をするか踊っているかしているんでしょう。（黒曜石の地図を確認する）ええ、もうの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向うからこっちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなったでしょう

電車の走行音が大きくなっていく。

赤い星が強く光り始める。

ジョバンニ　あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう

カムパネルラ　サソリの火だ

女の子　あら、サソリの火のことならあたし知ってるわ。

ジョバンニ　サソリの火ってなんだい。

女の子　サソリがやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。

ジョバンニ　サソリって、虫だろう。

女の子　ええ、蝎は虫よ。だけどいい虫だわ。

ジョバンニ　サソリいい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあってそれでさされると死ぬって先生が云ったよ。

女の子　そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯こう云ったのよ。

青年　バルドラの野原に一ぴきの蝎がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていました。するとある日イタチに見つかって食べられそうになり

ました。サソリは一生けん命にげてにげて。にげたけどとうとうイタチに押おさえられそうになりました。そのときいきなり前に井戸が現れたのです。サソリは真っ逆さまにその中に落ちてしまいました。もうどうしてもあがられないでさそりは溺れていきます。そのときさそりは斯う云ってお祈りしました。

カムパネルラ　ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまってイタチにくれてやらなかったろう。そしたらイタチも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなのさいわいのために私のからだをおつかい下さい。

青年　そうしていつかサソリのからだはまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしました。

女の子　いまでも燃えてるってお父さん仰おっしゃったわ。

カムパネルラ　そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にならんで

いるよ。

男の子　ケンタウル露つゆをふらせ。ふらせ。ふらせ。

ジョバンニ　ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だね

カムパネルラ　ああ、ここはケンタウルの村だよ

ナレーション　まもなくサウザンクロス。サウザンクロス。

青年　さあ、おりる支度をしてください。

男の子　僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。厭だい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。

青年　ここでおりなけぁいけないのです。

ジョバンニ　僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符持ってるんだ。

女の子　だけどあたしたちもうここで降りなけぁいけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。

ジョバンニ　天上へなんか行かなくたっていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりももっといいとこをこさえなけぁいけないって僕の先生が云ったよ。

女の子　だっておっ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ。

ジョバンニ　そんな神さまうその神さまだい。

女の子　あなたの神さまうその神さまよ。

ジョバンニ　そうじゃないよ！

青年　あなたの神さまってどんな神さまですか。

ジョバンニ　ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたった一人の神さまです。

青年　ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。

ジョバンニ　ああ、そんなんでなしにたったひとりのほんとうのほんとうの神さまです。

青年　だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。

青年、男の子、女の子降りる支度をする。

女の子　じゃあさよなら

ジョバンニ　さよなら。

赤い星が明滅する。フェードアウトしながら段々と車内が暗くなっていく。

ジョバンニ　カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのサソリのようにほんとうにみんなのさいわいのためならば僕のからだなんか百ぺん灼やいてもかまわない

カムパネルラ　うん。僕だってそうだ

ジョバンニ　けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう

カムパネルラ　僕わからない

ジョバンニ　僕たちしっかりやろうねえ

カムパネルラ　あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ

ジョバンニ　僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。

カムパネルラ　ああきっと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集ってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あっあすこにいるのぼくのお母さんだよ！

ジョバンニ　お母さん。

カムパネルラ　おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。ぼくはおっかさんが、ほんとうにさいわいになるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう

ジョバンニ　ぼくわからない。お母さん。何かを忘れている気がするんだ。

カムパネルラ　けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。

ジョバンニ、ポケットから銀貨を取り出す。

ジョバンニ　ああ、僕、お母さんに牛乳を取りに行くんだった。

ジョバンニ、勢いよく立ち上がる

カムパネルラ　ジョバンニ！

星明かりが眩く明滅を繰り返す。ゆっくりと明滅が闇に染まっていく。

カムパネルラ、退場

ジョバンニ　カムパネルラ、カムパネルラ、僕たち、一緒に……

暗転

闇の中でたくさんの声が響く

「子どもが水へ落ちたぞ」「カムパネルラが川へ入った」「どうして、いつ」「ザネリが、ザネリが」「カムパネルラはどこに行った」「ああ、みんなきた」「まだみつからない」「ザネリは家へ連れられて行った」「水に落ちたぞ」「どうした」「どこにいった」

「カムパネルラ、カムパネルラ」……声は繰り返す

薄明かりが差し込む

巡査　もう駄目です。落ちてから四十五分たちました

ジョバンニ、咳き込みながら立ち上がる

巡査　きみ、大丈夫かい。ああ、よかった、よかったよ。

ジョバンニ　カムパネルラは

巡査　カムパネルラは、川へ入った。ザネリがね、舟の上からうりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだそうで。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったようです。カムパネルラがすぐ飛びこんでザネリを舟の方へ押してよこしたんだが。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんですよ。

ジョバンニ　カムパネルラは（ゆっくりと立ち上がる）

巡査　ああ、濡れたままではダメですよ。風邪を引いてしまうでしょう。上

着を差し上げますから

ジョバンニ　いいえ、いいえ。お父さんが帰って来ますから。

巡査　そうか、一昨日大へん元気な便りがあったんだ。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだろうな。

ジョバンニ、上を見上げる

ジョバンニ　どうして僕はこんなにかなしいのだろう。僕はもっとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。空のずうっと向うに小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。